ISSN 2186 － 3989

外国語活動を対象とした校内研修の実践
－グループディスカッションに焦点を当てて－

階戸　陽太

Practice of In-school Training for Foreign Language Activities: Focusing on Group Discussion

Yota Shinato

北　陸　大　学　紀　要
第44号(2018年３月)抜刷

北陸大学紀要
第 44 号（2017）
pp.29～42
〔実践研究〕

外国語活動を対象とした校内研修の実践
―グループディスカッションに焦点を当てて―

階戸　陽太*、滝沢　雄一**

Practice of In-school Training for Foreign Language Activities: Focusing on Group Discussion

Yota Shinato*, Yuichi Takizawa**

Received December 4, 2017

Abstract

This paper aims to report an example of in-school training of Foreign Language Activities, to show the challenges of these activities, and offers suggestions for in-school training. The author (Shinato) was involved in in-class training at Tamaho Elementary School, Gotemba, Shizuoka Prefecture for three years beginning in 2012. Starting in 2011, this school conducted a two-year Foreign Language Activity research project assigned by the Gotemba City Board of Education. Upon completion of the research, the school continued to collect results of in-school training for Foreign Language Activities. The training consisted of a model lesson and a workshop coordinated annually by the author. Throughout the workshop, the author provided the Foreign Language Activities group opportunities for discussion and class information sharing sessions and encouraged the sharing of opinions. The discussion results of the four groups may offer suggestions for future training.

1. はじめに

外国語活動が 2011 年に必修化され，小学校での英語教育が実質的にスタートした。「英語ノート」，「Hi! Friends」が教材として使用できるようになり，小学校現場では外国語活動に関する動きに落ち着きを感じる状況もあった。しかし，2020 年の小学校 5, 6 年での外国語の教科化と 3,4 年での外国語活動の必修化が発表され，その内容も具体的になってくる中，文部科学省主導の中央研修が昨年（2014 年）度より始まっている。教科化に向けて，小学校での研修の必要性が高まっていると言える。

本稿では，外国語活動を対象とした校内研修についての一事例を報告する。また，グループディスカッションで現れた小学校教員の外国語活動に対する意識と外国語活動とグループディスカッションの成果と課題について考察し，外国語活動の教科化に向けた課題と

*国際コミュニケーション学部　Faculty of International Communication
**金沢大学　Kanazawa University

校内研修のあり方についての示唆を提示することを目的とする。

2. 校内研修とグループディスカッション

2.1 校内研修の重要性

教師の指導力向上等を目的として様々な研修が行われているが，その中の一つとして校内研修の重要性が指摘されている。佐藤（2015）は,「教師が学び成長するためには，専門家の学びの共同体（professional learning community）が不可欠である」(p.119）として，学校が学びの共同体となる必要性と校内研修の重要性を説いている。また,秋田（2012）も，学校は教師たちが専門家として学ぶ場所であるとし，校内研修が学校という組織における教師の学びの中心となる場と位置づけている。

外国語活動における研修としては，教師個人の英語力向上等を目的としたものも必要であるが，上記の指摘を踏まえると，教師が所属する学校という文脈の中で学びの共同体を形成し，同僚と協働しながら学び成長することが重要となる。特に，外国語活動については，各学校において，あるいは同じ学校であっても教師間で考え方や取り組みに差異があると考えられることから，相互に学び合う場である校内研修の重要性はよりいっそう増すものといえる。

2.2 グループディスカッションの意義

秋田（2012）は，校内研修のあり方に関わって，「同僚たちと，どのような授業や教育を実現したいかビジョンを中核に共有することが必要である」(pp.191)と述べ，教師間での議論の重要性を指摘している。また，各学校にはそれぞれ異なる文化があるため，異動後の新たな学校での同僚と共に学び合う関係の形成が必要であるとしている。高木他(2012）は，校内研修に対して経験年数，学校規模，研究指定の有無，校内での役割などにより教師間で，認識の差が生じることを調査によって明らかにしている。

外国語活動については，学校間や教師間で考え方や取り組みに差があることは既に述べた通りであるが,たとえ研究指定を受け教師が協働し積極的な取り組みを行ったとしても，研究指定期間が終わるとその成果や課題が十分に継続されない例を，筆者たちは学校現場に関わる中で少なからず目にしてきた。その原因の一つと考えられる教師の異動という問題に加え，その学校での経過年数などにより異なる教師の役割が校内研修での認識に差をもたらしていることを考慮すると，継続して教員相互に議論し，理解を深めていくことが重要になる。

そこで，校内研修として，授業研究に加え，教員相互による積極的な議論が可能となるグループディスカッションを取り入れることが有効であると考えられる。グループディスカッションを取り入れることによって，各教員の意識を明確にし，各自の意識を共有しながら相互理解を深め，学びを促進することが期待できる。そして，研究指定期間終了後も成果や課題を踏まえつつ，学校としての取り組みを継続的，発展的に行うことが可能になると考えられる。

3. 実践内容

3.1 参加校

静岡県御殿場市立玉穂小学校では，2011 年度から 2 年間，御殿場市教育委員会から外国語活動の研究指定を受けた。研究主題を「よく聞き，話し，自分の思いを持って友だちと関わる子の育成－外国語活動における fun から interesting への転換を通して－」に設定し，2012 年 12 月 7 日に研究発表を行った。

筆者（階戸）は，玉穂小学校より依頼を受け，2 年目の 2012 年度から指導助言を行った。

3.2 学校研究

玉穂小学校の学校研究の内容（鈴木・階戸，2013）について述べる。図 1, 2 が示すように，楽しいだけの外国語活動からの転換を目指し，子どもたちの知的好奇心を高め，考える場面を設定する工夫を施すことを目指し，学校研究を進めた。「fun から interesting への転換」をテーマに，3 つの方向から研究を進めた。一つ目は，授業の組み立ては学級担任が主体で行うようにした。二つ目は，ゲームや歌は質や量を考え，fun ではなく interesting なものになるように工夫を行った。三つ目は，子どもたちが「なんだろう，やってみたい」と思うように子どもたちの知的好奇心を高め，子どもたち自身が考える状況設定を工夫した（図 1)。こうした工夫を，図 2 のように，1 時間の授業の中で，また 1 単元の中で，さらに学年進行に合わせて行った。

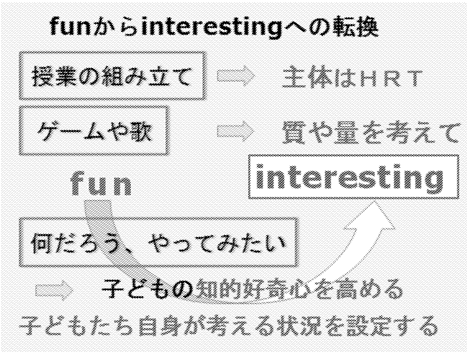

図 1 fun から interesting へ 1

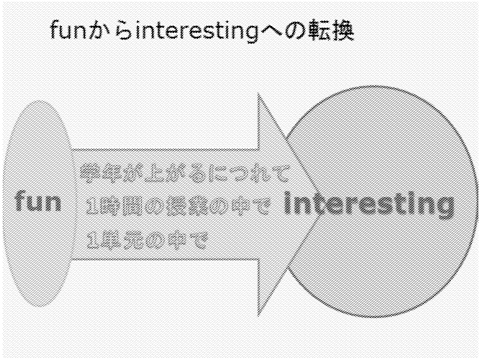

図 2 fun から interesting へ 2

具体的な取り組みを図 3 のように富士山のように表わし，まとめている。「Big voice, Eye contact, Smile, Try」の取り組みを「BEST」と呼び，共通の取り組みとした。低学年，中学年，高学年ごとに目標を定めた。自分のことを言えるようにし，相手に関心を持つようにしていく過程の中で，リアクション，コメントを入れるようにしていき，そして，自分の思いを言えるようにしよう，というものである。そのために工夫するポイントを「雲」が表わしている。「カリキュラムの作成」，「電子黒板の活用」，「場の設定」，「ワークシートの工夫」が工夫のポイントである。

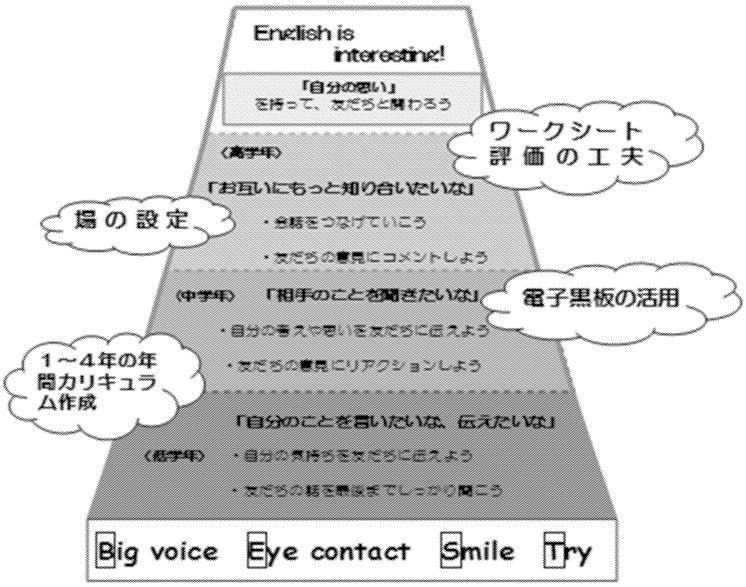

図３　具体的な取り組み

3.3 校内研修会

研究発表後，「研究成果を継続させたい」という学校長の意向もあり，校内研修を通して，玉穂小学校では外国語活動の研修を続けた。2 種類の校内研修を行った。1 つは，研究主任，外国語活動担当を中心にした教員のみの校内研修・公開授業，もう一つは，筆者が講師として行う年１回の校内研修である。本論では，筆者が加わった校内研修のみを取り上げる。

筆者が行った研修会は３部構成とした。2014 年度８月 29 日に行った研修を例に挙げる。最初に，授業のヒントになるようなワークショップを行い，次に日頃の情報共有の場としてグループディスカッションを行い，最後に筆者がまとめる形で，最近の外国語活動や教科化に関する情報を話す，という内容で校内研修を行った。

3.4 グループディスカッション

筆者が参加する校内研修会では，必ずグループディスカッションを取り入れていた。その意図は，一つには，研究成果の継続にある。毎年，異動で人が入れ替わり，他校から新しい教員が入ってくる。外国語活動に対する取り組みは，学校ごとに違うことが必修化後も変わらない現状である。そのため，これまでにいた人が新しく来た人に玉穂小学校の取り組みを伝える場面を設けるためである。また，毎日の仕事の中で，情報共有を行う時間を取ることは難しいのが現状である。普段の取り組みや疑問を共有する場にもして欲しいという意図もある。

図 4 は，グループディスカッションの内容を示したパワーポイントの一部である。2014 年度の校内研修会では，4 つのグループに分けてグループディスカッションを行った。1 つのグループは 5~6 名で，ランダムに構成した。手順は，グループごとに，外国語活動や授業に対する思い・疑問を付箋に書いた後，話し合いながら模造紙にまとめ，最後に全体でシェアした。

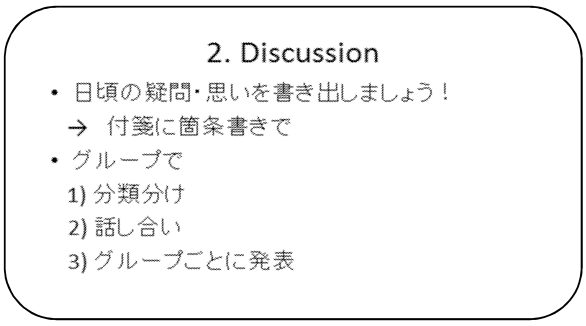

図 4　グループディスカッションの内容
（当日使用のスライドから）

4. グループディスカッションの分析

4.1 分析

2014 年度実施した校内研修で行ったグループディスカッションで各グループがまとめたものを分析することで，校内研修にグループディスカッションを取り入れることの効果について検証を行う。また，教員の外国語活動に対する意識についても分析する。分析は教員が整理したものの他に，筆者らが改めて質的に分析を行う。

質的分析の理論的背景として「構成構造主義」（西條，2007，2008）を援用する。西條によると，構成構造主義では，研究者の視点で，研究に関する事柄（調査対象，人数，方法など）を決めることができるとし，質的研究方法の考え方である。一方，分析方法としてグランデッドセオリー・アプローチを援用する。ここでは，戈木（2008）を参考にする。具体的な手順として，初めに内容によってラベル付けを行った。内容を重視したため，切片化は行わなかった。その後，内容を検討し，似たものをまとめて，カテゴリーを作った。さらにカテゴリーを整理し，最終的なモデル図を作成した。

4.2 教員によるまとめ

当日各グループの付箋に書かれたコメントを研究主任が整理を行った。図 5 がその一例で，表 1 がグループごとのまとめである。

外国語活動や授業に対する思い・疑問を書いたものであることから，教員の外国語活動に対する意識や課題，問題点を読み取ることができる。外国語活動に対して，「良さ」（a グループ。子どもに関するもの，指導方法に関するもの），「よさ」（d グループ。教員に関するもの，子どもに関するもの）といった肯定的なもの，「問題点」「準備に対する不安・負担」といった否定的なものがみられる。また，「課題の定着」「今後の英語について」「中学とのつながり」「評価」「ALT（外国語指導助手）+HRT（学級担任）の関係（教師の英語力　出の配分）」といった，外国語活動に対する課題が挙がっていた。

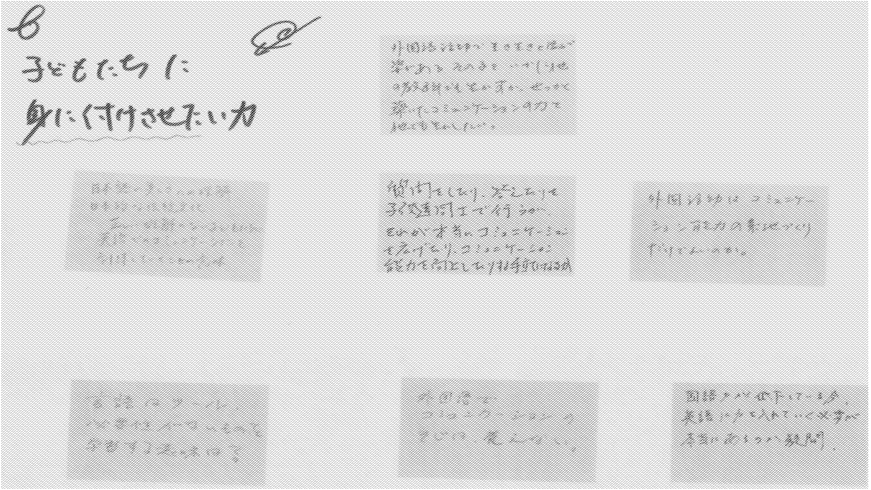

図 5 教員によるコメントのまとめの一例

表 1　教員によるまとめ

グループ	分類
a	良さ　個人差　課題の定着　環境　評価　今後の英語について ALT+HRT の関係（教師の英語力　出の配分）
b	子どもたちに身に付けさせたい力　5，6 年週 3 時間について　専門性 中学とのつながり　ALT との打ち合わせ　評価（通信票・要録）　授業の内容　単元構想
c	その他　授業　評価　問題点　他教科との関連
d	教師の英語力の不安　評価　英語が苦手な子への対応　カリキュラム・つながり　よさ　発音　準備に対する不安・負担　interesting の難しさ

4.3 質的分析

当事者の教員の目からでなく，筆者らがグループディスカッションの中で書かれたコメントを質的に分析した。

この結果，≪子どもの姿≫，≪外国語活動の発展≫，≪外国語活動の課題≫，≪外国語活動の現状≫，≪学校研究≫，以上 5 つのカテゴリーが生成された。表 2 にラベルの内容をまとめた。

表 2　分析のまとめ

カテゴリー	ラベル
子どもの姿	子どもの様子　英語力の差
外国語活動の発展	学び　他教科への活用
外国語活動の課題	力の差　できない子への対応　評価　教科化　英語力　授業運営　外国語活動への批判　外国語活動への疑問　英語専科教員　中学校との連携　英語での授業　意見　外国語活動の特徴　発音の変化
外国語活動の現状	授業運営　ALT による違い　ALT への依存　ALT　ALT との打ち合わせ　低学年の内容　単元構想　教材　準備　指導内容
学校研究	環境　特別支援の子ども　授業外　保護者・地域 授業内容　難しさ　声

実際に書かれた付箋の内容をカテゴリーごとに挙げていく。

4.3.1 子どもの姿

≪子どもの姿≫の内容の一例を表 3 にまとめた。

表 3　子どもの姿

≪子どもの姿≫
子どもの様子
・子どもたちは　ふだん関わりの少ないクラスの友達と話せることがうれしい様子でこれは外国語活動のよいことだと思う。 ・英語の時間だからこそできるコミュニケーションがあって，子どもたちは楽しそうにしている。
英語力の差
・先生の言葉をリピートする時，子どもが一斉に言うとできている子の声が大きくて，言えなかった子はずっと言えないでいる。

「子どもの様子」では，外国語活動の良さが表れている。一方，「英語力の差」では，できない子についての記述で，マイナスの面が表れている。

4.3.2 外国語活動の現状

≪外国語活動の現状≫の内容の一例を表 4 にまとめた。

表４　外国語活動の現状

≪外国語活動の現状≫
ALT との打ち合わせ
・ALT との打ち合わせが十分でない。(いざ授業で，ん？というギャップがいくつかある) ・ALT との打ち合わせの時間がなかなかとれない。
ALT
・ALT の力量によって，授業内容に差が出てしまう。 ・今は ALT がいていいが，HRT だけになると心配である。
授業運営
・アクティビティを楽しむあまり，きちんと質問文を言えてない時，注意してやり直してもいいと思うのですが・・・ ・今日の課題文は読めなくても文字で提示した方が，なれない子には手がかりになる。 ・英語で会話する練習（activity）の時間をとっても，ひそかに日本語や単語でやりとりしてワークシートをしあげてしまう子がいます。
低学年の内容
・単元を構成できない。１～４年は，どのように授業を進めていけばよいか？
単元構想
・月１で１単元は，単元構想が難しい（積み上げの力）
教材
・単元に関連する warm up で扱う音楽を入手しにくい。
準備
・最後に学習の成果がわかるものに仕上げるには，準備に時間がかかる。
指導内容
・ゲームのキャラクターを使わないで指導したいと思う。

ALT に関する記述の他，「授業運営」「英語力」「低学年の内容」「単元構想」「教材」「準備」「指導内容」が挙げられていた。

4.3.3 外国語活動の発展

≪外国語活動の発展≫の内容の一例を表５にまとめた。

表 5　外国語活動の発展

≪外国語活動の発展≫
学び
・肯定的に子どもの反応をとらえてほめるやり方は，他の授業でもやらなくてはと反省している。
他教科への活用
・外国語活動で生き生きと学ぶ姿がある。その子をいかに他の教科でも生かすか。せっかく築いたコミュニケーションの力を他でも生かしたい。 ・外国語学習で学んだ成果が，他教科への表現に波及していくとよい。

「学び」では，外国語活動の授業から，学んだことが記述されていた。「他教科への活用」では，外国語活動を他の授業につなげていくことについて記述されていた。

4.3.4 外国語活動の課題

≪外国語活動の課題≫の内容の一例を表 6 にまとめた。

表 6　外国語活動の課題

≪外国語活動の課題≫
外国語活動への批判
・日本語の美しさへの理解　日本的な伝統文化　正しい理解のない子どもたちに英語でのコミュニケーションを訓練していくことの意味 ・外国語でコミュニケーションの　そじ　は養えない。 ・言語はツール。必要性がないものを学習する意味は？
意見
・小学校のうちは英語（外国語）に親しむことで楽しくできることに重点をおいてもよいのでは。 ・自分の英語が通用したという実感があると，意欲につながっていくのでは？

「外国語活動への批判」では，これまでも言われてきた批判的な内容が表れている。日本語の必要性に関するもの，必要性がない，というものであった。外国語活動が必修化され 5 年目になるが，小学校教員の中に，未だに批判的な意見があることがわかる。
一方「意見」では，建設的な記述が見られた。

4.3.5 学校研究

≪学校研究≫のコメントの一例を表７にまとめた。

表７　学校研究

≪学校研究≫
環境
・玉穂小は英語を行うことで環境が恵まれていると思う。 ・授業の中で使うワークシートや教具のストックがあるといい。
授業内容
・あくまでも本校においてのことですが，１年生の時から外国語活動に取り組んでいると，５，６年では既習のことが多く，同じことを繰り返すことになってしまう。 ・玉穂小のカリキュラムで行うと，高学年や中学年で物足りなくならないか心配になる。 ・１年生からやると内容が底をつきてくる。（５，６年になって）
特別支援の子ども
・自分の思いを表出することの難しい特支の子どもにとって，辛い時間にならないか。
授業外
・学級でも英語を使っていますか？ ・日本語の語彙も不足しがちな低・中学年に英単語をどのように日常的に使えるようにしていくのか
保護者・地域
・重点目標 BEST が子ども　地域　保護者によく浸透しているように感じます。 ・保護者にも外国語活動の取り組みをもっと積極的に発信してはどうか
難しさ
・「fun」はたやすいが「interesting」は難しい
声
・やたらと Big Voice ではなく，場に応じた声になるように指導したい

「環境」では，研究成果に関連する記述があった。外国語活動の環境に恵まれているという記述がある一方,教材のストックの必要性に関する記述であった。「特別支援の子ども」では，特別支援の子どもに対する外国語活動への疑問が記述されていた。「授業外」では，授業外での英語の使用への質問が記述されていた。「保護者・地域」では，外国語活動の取り組みが保護者・地域に浸透している記述があった一方，外国語活動の取り組みをもっと地域に発信するべきだ，という，相反する記述もあった。「授業内容」では，学校研究の取り組みと関連する記述があった。玉穂小学校では１年生から英語活動に取り組んでいるため，5, 6 年生の内容の物足りなさについてのものであった。「難しさ」では，学校研究の主題に関わる記述があった。interesting な授業は難しい，というものであった。「声」では，学校研究の基本となった取り組みである，Big voice に関する記述があった。

≪学校研究≫に関する記述では，相反する意見がみられた。この点については，考察で

詳しく取り上げある。

5. 考察

教員による整理と，筆者らの質的分析の結果を比較しながらグループディスカッションについて，考察する。図 6 に，質的分析を通して考察した校内研修に取り入れたグループディスカッションの効果をまとめた。

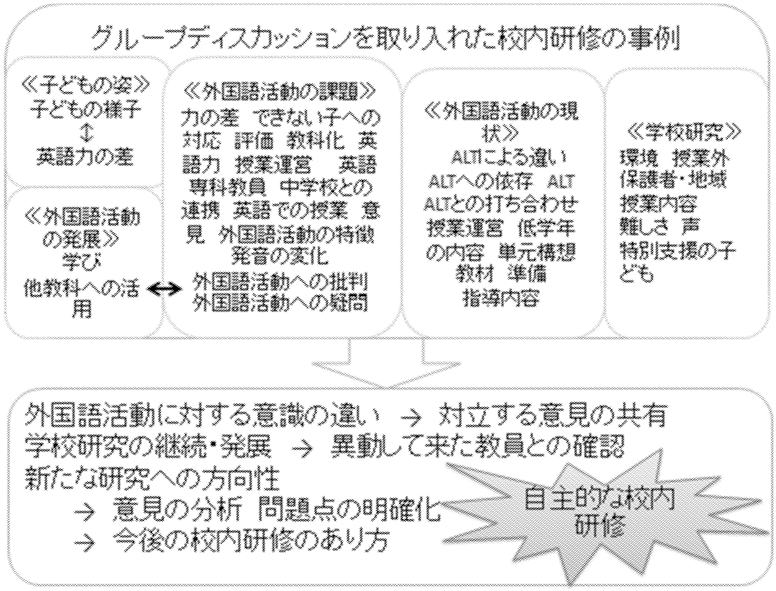

図 6 校内研修に取り入れたグループディスカッションの効果

5.1 対立する意見の共有

質的分析では，≪学校研究≫のカテゴリーが生成された。このカテゴリーに含まれた意見を教員がまとめたものに戻って考察する。グループディスカッションで対立する意見が，同じグループ内で出ていた。例えば，教員がまとめた b グループの「子どもたちに身に付けさせたい力」で「外国語活動で生き生きと学ぶ姿」がある。「その子をいかに他の教科でも生かすか。せっかく築いたコミュニケーションの力を他でも生かしたい」という外国語活動に対して肯定的な意見がある一方で，「言語はツール。必要性がないものを学習する意味は？」という外国語活動に対して否定的な意見があった。グループディスカッションを行うことで，相反する意見を共有することができる。

その他にも教員のまとめから，直接的ではないが，教員の外国語活動に対する意識を表わす言葉があった。質的分析からは，はっきりとした形で教員の外国語活動に対する意識が明らかとなった。≪外国語活動の課題≫のカテゴリーで，「外国語活動への批判」「外国

語活動への疑問」に分類できる内容があったことから，小学校教員の中には，まだ外国語活動への否定的な意識があることが推察される。

しかし，否定的な意見だけでなく，外国語活動に対して肯定的な意見もあった。≪子どもの姿≫では「子どもの様子」として，外国語活動には意欲的に取り組む子どもがいること，楽しそうに取り組む現状が述べられている。また，≪外国語活動の発展≫では，「学び」として，肯定的な評価をする手法を他教科にも応用したいという意見や，「他教科への応用」として，外国語活動の成果を他教科に生かす，といった肯定的な意見もあった。

秋田（2012）が指摘するように，校内研修が学校という組織における教師の学びの中心となる場とするならば，校内研修で外国語活動について研修を行っていくことは，教科化を控えてますます重要であると言えよう。こうした肯定的な意見と否定的な意見の両方の意見を，玉穂小学校の校内研修では，グループディスカッションを通して共有していることになる。

5.2 異動してきた教員との確認

公立小学校では異動があり，人が入れ替わる。外国語活動は，学校や地域で内容，取り組みに差があるのが現状である。a グループでは「環境」という項目で「玉穂小は英語を行うことで環境が恵まれていると思う」という意見と「授業の中で使うワークシートや教具のストックがあるといい」という意見があった。この二つは異動してきた教員のものと考えられる。学校研究を通した教材，ワークシートは，玉穂小学校に存在している。グループディスカッションを行うことで，異動してきた教員に対して情報を共有するきっかけにすることできる。

このように，学校研究にグループディスカッションを取り入れることで，異動して来た教員への情報共有が可能になる。高木他（2012）が指摘するように，経験年数，学校規模，研究指定の有無，校内での役割などによる校内研修の認識の差を埋めるだけでなく，その学校の取り組みの共有も可能となる。

5.3 新たな研究への方向性

今回の学校研究の目的の一つとして，学校研究の成果の継続があった。c グループの「その他」の項目に「重点目標 BEST が子ども　地域　保護者によく浸透しているように感じます」というものがあった。研究成果が継続していることが指摘されている。しかし，一方で「玉穂地区は外国語活動に力を入れていますが，子どもたちが日常の活動（会話）の中で外国語を積極的に使えていないのが残念」というものがあった。また「保護者にも外国語活動の取り組みをもっと積極的に発信してはどうか」という提案もあった。これらは，研究を終えて，新たな課題となりうるものと考える。グループディスカッションを取り入れることで，新たな方向性を考えることができること示している。

さらに d グループでは次のような意見があった。

「あくまでも本校においてのことですが，１年生の時から外国語活動に取り組んでいると，5,6 年では既習のことが多く，同じことを繰り返すことになってしまう」

「玉穂小のカリキュラムで行うと，高学年や中学年で物足りなくならないか心配になる」

いずれも，学校研究を終えて，発展的な課題となり得る意見である。研究の継続につがっていくものと考える。
こうした意見は，全て教員の中から出てきたものであり，自主的な校内研修へとつながるものと考える。秋田（2012）が指摘するように，校内研修によって学校・教師文化を継続させることが，グループディスカッションによって教員の学びを促進することが可能であると言えよう。

6. まとめ

グループディスカッションを校内研修に取り入れることで，対立する意見を教員間で共有することが可能になる。今回の事例から，外国語活動に対する意見が同じグループの中に出ていた。また，日頃の思いや疑問を共有する場にもできる。このことから，異動してきた教員とその学校でのやり方を確認することができ，今回の事例のように学校研究の成果の継続につなげることが可能になる。さらに，問題点を明確化することで，新たな研究の方向性を見出すことができると考える。グループディスカッションを取り入れることで，上からのお仕着せの研修ではなく，自主的な校内研修につなげていくことができる。

今回取り上げた校内研修では，各グループで出た意見を全体で共有した段階でグループディスカッションを終了し，その後を受けて筆者（階戸）が最近の外国語活動に関する現状を話し，方向性を示して校内研修を終えた。毎年，校内研修の結果を生かした具体的な動きはない。グループディスカッションの内容を教員にフィードバックを行いたい。教科化を控え，玉穂小学校の外国語活動の改善のサポートを続けていくことが，今後の課題の一つである。また，こうした校内研修にグループディスカッションを取り入れる実践を，他の場所でも継続していきたい。

2020 年度の外国語の教科化に向けて，校内研修の必要性が増してくる。自主的な研修を行うことができれば，小学校教員の意識も変わり，よりよい成果を期待することができる。そうした校内研修をサポートする実践を続けていきたい。さらに，こうした校内研修を可能な限り，多くの小学校で行っていきたい。

謝辞

研究発表時の研究主任であった鈴木さおり先生（御殿場市立印野小学校），今回のグループディスカッションをまとめて頂いた研究主任の芹澤猛先生（御殿場市立玉穂小学校）に感謝いたします。また，校内研修の機会を与えていただいた芹澤文夫前玉穂小学校学校長（御殿場市立玉穂小学校）に御礼申し上げます。

引用文献

秋田喜代美（2012).『学びの心理学−授業をデザインする−』左右社.
佐藤学（2015).『専門家として教師を育てる−教師教育改革のグランドデザイン』岩波書店.
鈴木さおり・階戸陽太（2013).「よく聞き，話し，自分の思いを持って友だちと関わる子の育成－外国語活動における fun から interesting への転換を通して－」『第 15 回小学校英語教育学会（JES）沖縄大会要項集』, 63.

戈木クレイグヒル滋子（2008）『実践グランデッド・セオリー・アプローチ　現象をとらえる』新曜社.
西條剛央（2007）.『ライブ講義・質的研究とは何か　SCQRM ベーシック編』新曜社.
西條剛央（2008）.『ライブ講義・質的研究とは何か　SCQRM アドバンス編』新曜社.